

ない。同一階層で形成された社交グループの仲間であろうか。中村平左衛門が書いていることが本当であれば、畑市六は「希代のやまし」（山師＝詐欺師・ペテン師）である弟・作右衛門に足を引っ張られ、「才子」で、「功者」で、「節檢質素の生質」も潰されてしまった。悲運としか言いようがない。

二 宗教者

蓮井雲溪

下田村の三会寺は、菩提山四十九院の一つで、最澄の開山と伝えられ、延暦年間から天仁年間のころ（七八二―一一一〇）までは、大伽藍を誇ったと言われる。戦国期、大友の兵火によって菩提山四十九院のうち四十六院は灰燼に帰し、残ったのは菩提村宝積寺、当村霜田寺、そして三会寺のみであったという。それ以後、同寺は衰微の一途をたどり、住僧も禪宗・真言宗・真宗と、その時々によってまちまちであったと伝えられる。正徳元年（二七一）に仲津郡今井村（現行橋市）真宗大谷派浄喜寺弟子の恭海が、本堂・庫裏を再建して以後は浄喜寺の末寺となった。しかし、その後も浄喜寺から住僧が派遣されたり、無住になったりを繰り返したが、嘉永年間（一八四八―一八五四）ごろに、田川郡川崎村（現田川郡川崎町）光蓮寺（浄喜寺末）の蓮井雲溪が住持となつてからは、寺の経営も安定したようである（明治五年「宝暦度書上落末寺・末庵・小庵・小堂帳」浄喜寺文書他）。明治十二年（一

八七九）、蓮井雲溪は下田村霜田寺跡の建物・不動産（霜田庵と呼ばれる小堂があった）を購入。翌年には三会寺の名称を光円寺と変更する許可を得て、当該地に光円寺が新築された（『京都郡誌』）。その後、光円寺は明治三十四年（一九〇一）に上久保（現勝山町）に移転したが、後年無住となり、平成三年の台風によって建物は全て失われてしまった。

なお、蓮井雲溪の学徳の高さは本山も認めるところで、明治十八年（一八八五）七十五歳で没するまでに、大谷派内において極めて高い学階にまで昇進している（『豊前人物誌』）。精力に数多くの説法をこなし、その平易な語り口は人気が高かった。また地域住民からの信頼も厚かったことが当時の史料からうかがえる（『仏山堂日記』他）。

佐藤種

明治八年（一八七五）三月、中黒田村権現山の佐藤種邸内にあった塾舎を仮校舎として小学校が開設された。後に上黒田の村上氏宅を仮校舎にしたが、同九年（一八七六）十二月に再び中黒田村字勝山へ移り、勝山神社境内の空家などが校舎に利用された（『京都郡誌』）。その中黒田村勝山神社は、藤原広嗣にまつわる縁起を持ち、江戸時代には勝山権現あるいは飯岳権現と呼ばれ、里修験の山伏が管掌する社であった。かつては、雨乞いに靈験があると、周辺の村々から厚く尊崇されていた。江戸時代末、当社別当の胎藏院智証は、上稗田村（現行橋市）の漢詩人・村上仏山と親交のあった

ことが確認できる（『仏山堂日記』）。智証は、明治初年に修驗道が禁止されてから還俗し、名前を佐藤中と改めて胎藏院跡で漢学塾を開いたという。これが黒田小学校の前身というので（古賀武夫『村上仏山を巡る人々』）、この佐藤中は、佐藤種と同一人物と思われる。

ところで、勝山権現のことは、京都郡の庄屋・大庄屋文書が、幕末の打ちこわしで大部分焼失したこともあって、その実態を知ることが叶わないが、次のように、まれに史料に登場することがある。

御届け申し上げる口上覚

一、歳三十四 大橋村久右衛門弟 久平

但、中勢・長面

着用の品

一、生壁緋入堅縞単物

一、紺木綿帯

一、菅笠

右は兄利右衛門病氣に付き、京都御郡勝山村山伏に罷り出、考えもらい候由にて、一昨十八日四ツ時罷り出、罷り帰り申さず付き、迎えの者差し遣わし候得共、勝山村へは参り申さず由にて罷り帰り候に付き、何方の様罷り出候哉と隣家の者共今朝迄方々尋ね方仕り居り候得共、行方相知れ申さず、家内不和合の儀も御座無く、ふと罷り出候儀は全く狐狸

の仕業共にては御座ある間敷哉と存じ奉り候、仍て御届け申し上げ候、以上

五月廿日

大橋村庄屋 白石治右衛門

右の通申し出候間、御届け申し上げ候、以上

国作良平

和田藤左衛門様

（国作手永大庄屋文久三年日記五月二十日条）

文久三年（一八六三）五月、大橋村久平が、病氣占考のため、京都郡「勝山村山伏」の所へ向かう途中行方不明となった一件の届書である。京都郡に「勝山村」という村はないので、正しくは中黒田村の勝山権現である。時期的なことを考えれば、史料中の「山伏」は胎藏院智証、後の佐藤種（中）ではないかと思われる。

第二節 飢饉と災害

一 飢 饉

享保の飢饉

江戸時代の飢饉の中で、享保・天明・天保の各期に起きた飢饉は三大飢饉としてよく知られているが、西日本の場合で言うと、享保の飢饉ほど、短期間のうちに凄惨を極めた飢饉は、少なくとも江戸時代には他に例がな